

夏休み谷根千まち歩き報告

みんくるプロデュース代表 孫大輔

みなさん、こんにちは。一般社団法人みんくるプロデュース代表の孫と申します。

みんくるプロデュースとは、市民・患者と医療専門家をつなぎ、コミュニティの健康を向上させる活動を行っている団体です。ふだんは、「みんくるカフェ」という市民と医療者の対話の会や、地域のフィールドワークを通して地域の健康を考えていく活動などを実践しています。

みんくるプロデュースでは、今年の8月に、NPO 市民科学研究室（以下、市民研）と協力して、主に医療系の学生や専門職の人々とともに、谷根千（やねせん）＝谷中・根津・千駄木のまち歩きを通して、地域の暮らしと健康を学ぶ2日間のイベントを開催しました。

参加したのは、医学生、看護学生、薬学生、心理学の大学院生、また医師、管理栄養士などの専門職を含め13名の方々でした。みんくるプロデュースのスタッフは8名参加し、その上、市民研の上田さん、谷根千ナビゲーターの眞鍋じゅんこさん、山崎範子さん、権上かおるさんにもご協力いただきました。まことに御礼申し上げます。

今回のイベントの目的は、まち歩きというフィールドワークを通して、医療目線だけで地域を見るのではなく、地域の「暮らし」を知る中から地域の魅力と課題を発見すること、としました。「医療モデル」から「生活モデル」への変換が重要と言われている昨今の医療・介護分野において、専門家にも地域の生活者からの視点を養ってもらうことが狙いです。

1日目の案内役は、フリーライターの眞鍋じゅんこさんです。眞鍋さんは雑誌「散歩の達人」に創刊から関わる一人で、全国さまざまな地域や人々を訪れ、ルポを書かれたりしています。1日目は主に千駄木と根津を歩きました。まずは、千駄木にある市民研事務所の横、須藤公園から出発し、団子坂を登って、大観音様で有名な光源寺を訪問し、島田富士子さんにお話を伺いました。島田さんの話で最も印象的だったのは、「縁日や防災を通して地域力を育てる」という話です。数年前から島田さんらが中心となり「ほおずき千成り市」という地元住民による縁日を始めましたが、この縁日のすごい所は一切プロ（テキ屋）や行政の手を借りずに運営しているところ。それにより「地域力」が養われ、それは防災活動や震災支援活動にもつながりました。光源寺を後にして、千駄木ふれあいの杜（通称屋敷森）に行きました。ここは住民によって管理されており、定期的な清掃などは周囲の住民によって行われています。その後、観潮楼（森鷗外旧宅）の前に到着。その名の通り、昔は海が見えたくらいに高い坂の上にあります。

ます。当時、森鷗外は馬に乗ってここから仕事場に通っていたとか。その後、ネパール料理店「ミルミレ」を訪れ、チェトンさん・インジュナさんご夫妻にお話を伺いました。20年以上前に来日されたご夫婦は、今では日本語も流暢に話されますが、来日してしばらくは地域に馴染めず苦労したそうです。「日本語ができないと仲間はずれだった」とのインジュナさんの言葉が重く響きました。次に訪問したのは根津の「伊藤風呂店」です。江戸時代より続く風呂桶、箱風呂職人の宮原さん親子の話を伺いました。手作りの桶は一切接着剤や釘を使わず、木が持つ自然な曲線を利用して組み合わせ、たがをはめるだけで作られています。しかし時代とともに風呂桶屋は激減し、銭湯屋やガス屋になっていったそうです。そんな時代の流れにも負けず、伝統の技を守り抜いた宮原さんの話に職人としての誇りや、日本人と木を使った暮らしの深い関係などを考えさせられました。最後に、根津の人々の憩いの場である根津神社を訪れて、1日目は終了しました。



2日目は、雑誌「谷根千」を編集していた谷根千工房ゆかりの方々、山崎範子さんと権上かおるさんに案内役をお願いして、主に谷中のまち歩きをしました。谷中は、戦時中の空襲でも焼け残った地域が多いことから、江戸から続く古い街並みを残しており、また数多くのお寺があり「寺町」と呼ばれています。まずは、三崎坂沿いを折れて「へびみち」(旧藍染川)を行き、その後谷中墓地へ向けて進みました。細い路地や階段が多くあり、途中で井戸にも遭遇しました。また大きな木が道の途中に生えていたり、くねくね道が曲がっていたり、歩いているだけで楽しい小道が続きます。谷中のシンボルツリー「ヒマラヤ杉」は、高さ15メートル、みかどパン店の敷地にあり、元々は戦前、現店主の祖父が鉢植えの状態から育てたものだそうです。この大木も景観保存運動の象徴的存在になっています。



瑞林寺の門前の広い道を通り、民家の間の細い路地を抜け、谷中墓地に出ました。墓地内に桜並木の通りがありますが、昔はここでお花見もやっていたそうです。山崎さんは、墓地というのは怖いところではなく懐かしむような身近なところだったと仰っていました。彰義隊の戦いのときの銃痕が残る経王寺を見て、その後谷中銀座へ。さらに、よみせ通り商店街を通過して「谷中の家」に伺いました。建築ジャーナリストの西川直子さんによる「谷中の家」は、古民家の建築材を残しながらリフォームした家で、今は 1 階部分をイベントスペースとして開放しています。西川さんの思いは「古いものをできるだけ壊さずに残す」ということで、そのモデルハウスだとおっしゃっていました。景観保存という視点からはできるだけ古い街並を残したいのに、行政側は建て替えに補助金を出しており、住民と行政でギャップがあることを語っておられました。最後に谷中防災コミュニティセンターと初音の杜（防災広場）、そして 1945 年 3 月 4 日の空襲犠牲者を慰霊した坂下平和地藏尊を見学し、2 日間のまち歩きは終了しました。



学生さんたちとの振り返りでは、「お地藏様ひとつ、民家ひとつでも歴史があることが分かった」、「市民の努力のもとに『地域力』が構成されていることが分かった」、「雑誌・谷根千の活動が地域のつながりを深めたことが分かった」、「防災や縁日、景観保存を通して地域づくり・まちづくりが行われていることを実感した」など、谷根千の地域づくりと人々の暮らしに関する気づきが述べられていました。また、「実際に自分で歩いて見て聞くことの大事さが分かった」、「地域を見るときに健康に縛られない視点を得ることができた」、「健康の概念が大きく広がった」などフィールドワーク、つまり自ら歩いて観察することにより得られる視点に関する気づきも得られていました。さらに、ある方からは「お寺が多くあるのにあまり市民活動とつながっていないのでは?」、「防災の視点と景観保存の視点で建て替え問題などジレンマがあり難しい問題」など問題提起をする視点も見られました。

私が感じたことは、谷根千という地域のあり方がまず特殊であること、つまり、行政区をまたぐ形で生活圏としてこのエリアが多様性を保ちながらもひとつのアイデンティティを獲得している独特な地域であるということ。そして、この地域の人々のソーシャルキャピタル（人々の信頼関係と結びつき）のあり方が、縁日、お寺、景観保存、防災などユニークなものばかりであり、人々がエネルギーであるということでした。ただ歴史も古いためにコミュニティ

に閉鎖的な部分もあることを感じましたが、これは全国で共通する問題だと思います。今後、谷根千のような地域の、様々な社会的要因やソーシャルキャピタルが、人々の健康にどのように影響しているか、ということに引き続き注目していきたいと思います。

改めまして、今回お世話になりました眞鍋さん、山崎さん、権上さん、市民研の上田さん、また夏の暑い最中のまち歩き企画に参加して下さった皆様に御礼申し上げたいと思います。

みんくるプロデュースは、今後も谷根千地域をフィールドとして、まち歩きや、そこに暮らす人々へのインタビュー、ワークショップなどを開催する予定です。そうした活動を通じて、コミュニティの健康を向上する活動につなげていきたいと考えています。

問合せ：mingleproduce@gmail.com（みんくるプロデュース事務局）